毎日がサプライズを目指して
－『Hi, friends!』を用いた授業実践の報告から－

有田桃子（ARITA Momoko）
徳島県板野町板野東小学校

要約

本校の外国語活動は，昨年度までは学級担任が ALT と連携して授業を進めてきた。しかし，平成 24 年度からは，本校の特別措置によって外国語活動を担当することになった私が，学級担任や ALT とともに授業を行うことになった。５・６年生はどちらも，共通教材である『Hi, friends!』を用いて，学年や児童の実態を考慮しながら単元の順序を入れ替えたり，季節や行事に合わせた活動を取り入れたりして授業を行っている。10 月から ALT が不在となったことより，現在は私と学級担任の先生が指導に当たっている。『Hi, friends!』の活用実践報告に当たって，本校の５・６年生を対象にした外国語活動の授業を中心にいくつかの実践事例を記していく。

（キーワード：小学校外国語活動，『Hi, friends!』，児童中心）

１．外国語活動で目指すべき力

外国語活動の最終目標は，「コミュニケーション能力の素地を養う」ことである。しかし，一概にコミュニケーションと言っても，ただ自分の意見を互いに言い合うこととは異なる。『小学校学習指導要領解説外国語活動編』に記されている外国語活動で目標とすべきポイントは下記の三点である。

①言語や文化について体験的に理解を深めること
②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成
③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませること

上記の①と③の力を十分に育ててこそ，②の他者とのコミュニケーションを図ろうとする態度につながっていくと考える。そこで，本校の児童の実態に即して，５年生では観点③に，６年生では観点①に重点を置いて取り組むことにした。

２．５年生での具体的実践

本校の５年生の特徴としては，外国語活動に意欲的な児童も多くいる反面，なかなか授業自体にうまく参加できない児童もいるというのが現状である。全体的にとても力強いパワーを持っているが，活動をしている時と聞く時のメリハリがつけられず，盛り上がりが過ぎてなかなか軌道修正が難しいという状況も多々あった。彼らの力強いパワーをなんとか良い方向にもっていきたいという思いを常に念頭に置き，担任の先生の協力を得ながら，外国語活動の指導に取り組んできた。

コミュニケーション能力を養うためには，相手の話を聞く力を養うことが急務であると考え，一学期は英単語を用いたゲームを多く取り入れた。キーワードを言われた時だけ消しゴムを取る「キーワードゲーム」や，指導者の言っていることをよく聞いて絵カードを好きなものと嫌いなものに分ける「集中力ゲーム」などである。また，授業の合間に「speaking」や「listening」などの絵カードを適宜示し，活動の時と説明を聞く時のメリハリをつけるようにした（図１）。また，黒板には活動の内容をひとつひとつ示したカードを掲示した。このように視覚的に訴える教材を用いたことにより，当初よりも児童が大分授業に集中して取り組めるようになってきた（図２）。

（図１）speaking カードや listening カードなど

（図２）視覚的に分かりやすい板書

２学期からは具体的に相手意識を持ちインタビューを行う活動を多く設けた。それが「Lesson 5 What do you like?」である。導入部では，聞く力を養うために絵本の読み聞かせを行った。*Brown Bear Brown Bear What Do You See?*と *LEMONS ARE NOT RED* という２冊の絵本を用いて，児童と英語での色の言い方を確認した。２学期のはじめでオリンピックが世間を賑わせている時期であったことより，オリンピックロゴの色なども一緒に確認し，

それぞれが何を表しているかも同時に説明した。

形の導入の時は,ただカードを見せるだけではなく,三角や星の形をしたトライアングルやタンバリンを見せるなど工夫を行い，児童が興味・関心を示しやすいようにした。

次時から具体的な活動に入っていく。「担任の先生にオリジナルTシャツをプレゼントしよう」という活動を設定し､ワークシートにいくつかの質問項目を作って,担任の先生に好みの色や動物などのインタビューを行った（図 3）。『Hi, friends!』では友達にTシャツを作るという活動が設定されているが,学級の児童の実態を考慮した際,ペアで互いに活動するよりもこちらの方が効果的であると感じたからである｡ただ機械的に英文を練習するだけではなく,相手のことを知りたいという思いが生じてはじめてこれらは生きた英語となり，生きたコミュニケーションになる。担任の先生というのは，児童にとって知りたいと思わせる最適の対象だったようで，児童は先生のために素敵なTシャツを作ろうと意欲的に活動に取り組んだ（図４）。

（図 3）児童のワークシート

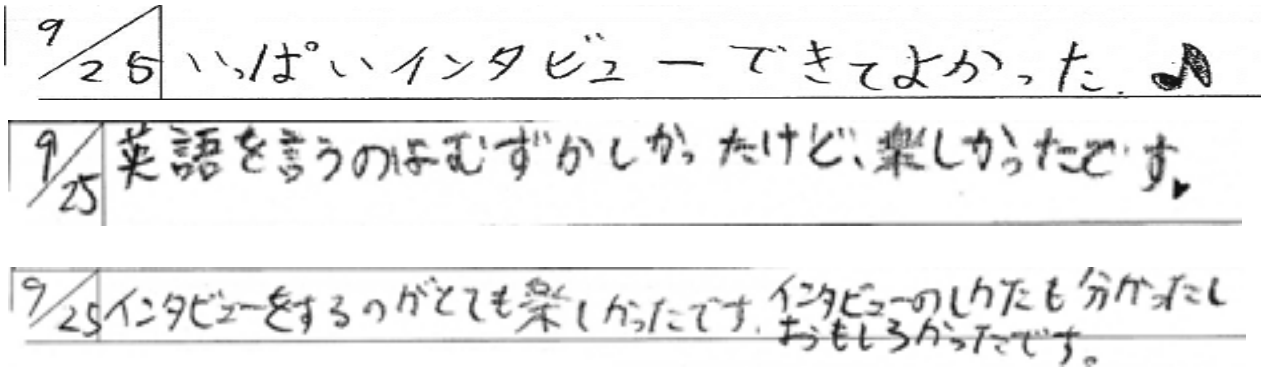
最後には先生が選んだお気に入りのデザインを，折り紙やシールなどを使い実際のTシャツに仕立てて着用していただいた（図５）。また，自分たちがデザインしたTシャツを紹介し合ったり，そのTシャツをクイズやゲームにも活用したりするなどし，児童が興味を示せるように学習の中に取り入れた。

さらに活動を深めるために，前年度の二人の担任の先生にゲストとして動画に登場していただいた。児童は先生にいくつかの質問を行い，その答えはあらかじめ作成しておいた動画で紹介される。“What color do you like?”や“What animal do you like?”といった質問である。どんな答えが返ってくるのか分からない，この先生ならこんな答えを言うかもしれなという期待感で，児童は熱心に動画に見入った。

（図４）担任の先生のためにTシャツを作成

（図５）児童の描いたTシャツを実際に再現

この後学級内で自由にインタビュー活動をさせてみたところ，普段はなかなか声が出ない児童も，学級全体の活動意欲が高まっている中で，自信を持って友達と英語で対話することができた。この後の感想からも，１学期と比べて，児童からもコミュニケーション活動に意欲的な意見が多く見られた。



Lesson 7 は単元の内容の関係上，全体的にゲーム活動が中心となった。第一時の導入時にデジタル教材の絵カードを表示し，“What’s this?”と尋ねたところ，あまり児童の食いつきがよくなかったことが印象的であった。イラストが簡単すぎたのかと思い，次時では実際の写真を使ってカードを作成しキーワードゲームなどを行うと，第一時とは異なり，多くの児童が食い入るように絵カードを見ていた。時と場合に応じて，デジタル教材と自作の教材を使い分ける必要性を感じた事例であった。また，グループ内でカードの文字を並び替えたり（図６），学級全体で「What’s this?クイズ大会」を行ったりして（図７），仲間と協力をしあいながら学習を深めることができたように思う。

（図６）仲間と協力してカードを完成

（図７）What’s this?大会

毎回授業の導入には“What’s this?”と児童に問いかけを行い，様々な物を見せてきたが，インドの魔除けやヨルダンの砂坪など，児童が思わず本当に“What’s this?”と聞きたくなるようなものを意識して選んだ。コミュニケーション活動と同様に，本当に児童が「知りたい」「聞きたい」と思えるような導入の工夫が大切であると感じた。

３．６年生での具体的実践

６年生は全体的にとても落ち着いていて，授業自体は行いやすい反面，少々積極性に欠ける児童が多く見られる。アクティビティやチャンツ等は気恥ずかしさもあるのか，そこまで大きく盛り上がるということはない。しかし，私は彼らの十分に身についている聞く力をさらにプラスの方向に持って行くようにした。５年生では聞く力の育成を優先させたが，６年生では多くの異文化への知識理解を深めてもらおうと考えた。これらはどちらも，それぞれの学年の実態を考慮したうえで，外国語活動の最終目標である「コミュニケーション能力の素地」の育成に必要不可欠な要素だと思ったからである。

『Hi, friends!』の単元の順序に即して，世界の文字をワークシート形式で一緒に考えたり，実際のエジプトの出入国カードや諸外国の世界遺産への入場チケットなどを紹介したりするなど，世界の行事や各国の文化についての興味関心を児童に喚起した（図８，図９）。

（図８）バンパイン宮殿チケット（タイ文字）

（図９）エジプト出入国カード（アラビア文字）

Lesson 5 で学習する“I want to ～.”という表現を用いるためには，本当に児童がその国に関心を示し「行ってみたい」と思わせることが肝要である。そのために多くの時間をかけて，実際に私が訪れたことのある国の写真をスライドショー形式で紹介した。また，国旗にも深い歴史的な意味があるということを伝え，国旗カルタを用いてゲーム感覚で国旗の種類を学んだり（図10），成り立ちについてパワーポイントで紹介したりした。

（図 10）国旗カルタで世界の国旗を学ぶ児童

最後の時間は，ワークシート形式で自分の意見をまとめさせた後，友達同士でインタビュー活動を行った（図 11）。自分が行きたい国を考える時に，自分から積極的に各国の有名な

ものなどについて質問してきたり，地図帳でそれぞれの国の場所や地形などを調べたりしている児童が多かったのが印象的であった（図 12)。地図帳を見てその国の場所を初めて知ったという児童も多く，教室の至るところから驚きの声が上がっていた。こちらから指示をするわけではなく，自発的に諸外国について調べようとする姿勢に感心させられた。これらのことから，多くの児童が心から興味・関心を示し，その国に行ってみたいという強い気持ちが高まっている様子をうかがうことができた。

↑（図 12）地図帳で自分の興味のある国を調べる児童

←（図 11）行きたい国紹介ワークシート

Lesson 3 では, 5 年生と同様に何人かの先生方に動画で登場していただき, “Can you ～?” を使った質問の仕方を学んだ。前学年の担任の先生や，教頭先生など，多くの教職員に協力をしていただいたところ，普段はおとなしい児童たちが笑顔を浮かべ動画を食い入るように見ていたのが印象的であった。この後，6 年生の児童が動画に出てくれた先生に，動画の内容に関係することを話しかけている姿を見かけた。週に 1 時間の外国語活動の時間ではあるが，児童と先生たちの距離を縮めるひとつのきっかけとなってくれたのでたのではないかと感じ，嬉しく思った。

この単元においても異文化理解につなげるために，国ごとに文化や法律によってできることとできないことがあるということを，ショートスキットの形で紹介した。インドでは左手を不浄のものとしているため，食事や握手の際は右手を用いるということや，シンガポールでは，電車内での飲食や路上でのごみの放置が厳しく罰せられるということなどである（図 13)。熱心に聞き入る児童の姿からは，これまで知らなかった世界の実情に興味を示し始めている様子を見て取ることができた。

また，この単元ではチャンツの時にただ聞くだけではなく，小さなカードをペアに配布し can と can't をしっかりと聞き取りどちらかに分けさせ，目的意識を持ってチャンツを聞かせるようにした（図 14）。

児童に“Can you～？”と質問を投げかけていく内に，けん玉が得意な子やサッカーが上手な子など，学級内の友達の意外な一面が多く見られ，クラス中から驚きや喜びの声が上がった（図 15）。

（図 13）シンガポールの標識

（図 14）目的意識を持ったチャンツ活動

（図 15）友達の意外な特技を発見

４．『Hi, friends!』を使ってみての成果と課題

(1)児童がどのように変わっていったか

４月当初と比較し，授業の開始前に「先生，今日は何するん」と尋ねてくれたり，すれ違いざまに“Hello.”と声をかけてくれたりする児童が増えてきた。外国語活動に関して非常に意欲的な児童からは，世界の歴史や文化についての質問をもらうことも多くある。もちろん全ての児童がというわけではないが，４月当初と比べると，確実に外国語活動への関心が高まってきてくれているのではないかと感じている。

(2)『Hi, friends!』を活用してみて，よかったことや困ったことなど

やはり小学校教員はひとつの教科だけを教えているわけではないので，外国語活動だけにかかりきりになることはできない。そういった授業準備時間の確保という面でも，『Hi, friends!』を基盤とし，系統立てて学習することができるのはありがたいと感じた。各学年の児童の実態を考慮した上で，順番を入れ替えたり，内容に色々な活動をプラスしたりするなど，いくらでも活用の方法はある。デジタル教材に関しては，音声動画や絵カードが非常に充実しており，授業の際に多く活用させていただいた。また，『Hi, friends! 2』では，各国の

紹介ＶＴＲが豊富で，児童が異文化を学ぶために非常に有用であると感じた。しかし，全てをデジタル教材に頼るのではなく，単元の内容によっては，絵カードを手作りしたり，ワークシートを作成したり，その時々に応じて，多くの自作教材を作成してきた。全てをデジタル教材に頼るのではなく，臨機応変に判断し，活用する時としない時のメリハリをつける必要性があると感じた。

５．終わりに

英語を流暢に話せるようになることが外国語活動の最終目標ではない。外国の人を相手に英語が通じなくても，目と目があえば自ずと相手の言いたいことが分かる場合もある。あるいは，ボディランゲージを使ったり，筆談で相手に思いを伝えたりすることもあるかもしれない。英語は数ある言語の中のひとつであり，コミュニケーション手段のひとつである。相手に何かを伝えたいという思いが生じたとき，コミュニケーションは初めて成立する。相手のことを知ることで，自分を客観視し自分の在り方を見つめ直すようになるかもしれない。コミュニケーションを通して相手を理解し，自分を理解することが大切であると考える。

日々の授業実践の中で，少しでも児童が英語を使って人と関わり合うことの喜びを感じられるようになってほしいと願っている。日々の生活は毎日が素晴らしい驚きに満ちている。それは新たな学びであったり，新たな人との出会いや触れあいであったり，個々によって様々である。外国語を駆使することは新たな出会いや喜びを感じるためのひとつの手段でもある。子どもたちは将来どこかで異文化と触れあい，外国の方と交流する機会があるかもしれない。その時外国語を使って自分の思いを表現できたことが，ひとつの自信を持てるきっかけになるよう願っている。日本を知り，世界を知り，様々なことに目を向け，人と人とのつながりを大切にしてほしい。そして，多くの人と触れ合うことで自分自信の生き方を模索していってほしいと思う。日々の生活をより楽しく，実りあるものにしていくためのきっかけを子どもたちに提供していけるような外国語活動の授業を，これからも目指していきたい。

引用文献

文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説外国語活動編』東京：東洋館出版社.
文部科学省（2012）『Hi, friends! １』『Hi, friends! ２』東京：東京書籍.
Carle, E. (1992). *The Very Hungry Caterpillar.* New York: Philomel Books.
Seeger, L. V. (2004). *LEMONS ARE NOT RED.* New York: Roaring Brook Press.